プラン・ニュース［2022 Summer］NO.120

PLAN NEWS



支援者インタビュー

角田光代さん
より良い世界のための〝使命〟と支援活動

プラン・スポンサーシップ

卒業したチャイルドのストーリー

ブルキナファソ

女の子が売られない社会づくり

ソマリア

干ばつ危機下の子どもの教育

発行：公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン

作家・角田光代さんが語る

より良い世界のための〝使命〟と支援活動

新刊『タラント』では、ボランティアや戦争を題材に、
ひとりの女性が自分の使命や才能を再発見する様子を描いた作家・角田光代さん。
プラン・インターナショナルの支援者としてさまざまな国を視察して感じたことや
ウクライナ危機への思いを語っていただきました。



かくたみつよ：1990年に『幸福な遊戯』で海燕新人文学賞を受賞しデビュー。その後『対岸の彼女』（直木賞）、『八日目の蝉』（中央公論文芸賞）、『かなたの子』（泉鏡花文学賞）、『私のなかの彼女』など著書多数。プラン・インターナショナルの支援者として、2009年に西アフリカのマリをはじめ、各国の活動地域を視察。Because I am a Girlの翻訳も手がける。今年、5年ぶりに執筆した長編小説『タラント』（中央公論新社）も話題に。

「大義名分がどうとか気負って支援をする必要はない。そう考えたら楽になりました」

視察では女の子たちの心の底の叫びを想像する

――プランの支援者として、マリやインドなど多くの国を訪れています。視察の時に心がけていることはありますか？

角田光代さん（以下、角田） 現地の人の話に、きちんと耳を傾けることを大切にしていますね。そうすると、「この女の子は今、本当のことを言っていないな」、「大人にこう話した方がいいって教わったことを、そのまま口に出しているな」とかが見えてくるんです。外から来たほぼ初対面の相手に、本心を打ち明けないのはむしろ自然なこと。だからこそ、心の底ではこの子は何を言いたいのだろうかと想像力を使いながら、話を聞くようにしています。

――そのように支援先の人に向き合って、印象的だったことや発見したことはありますか？

角田 「この人たちは新たな言葉を得たことで、道が開けたんだ！」って見えたことがあり、それは強く心に残っていますね。パキスタンで家事使用人の女性たちの集会に参加したんですが、そこではみんなが言いたいことを何でも話すんです。「気づきと、それを声にする機会」という言葉を、おそらく彼女たちは新たに知ったのでしょう。話し合いでは、全員が「気づきと機会」を連発していました。彼女たちの多くは住み込みのお手伝いとして、幼い頃から働いていて、休みもほとんどない。その状況がおかしいということに気がついていなかったのですが、現地の支援で「気づきと機会」という言葉を知り、はっとした。まさに気づき、現状を変えようと声にすることを学んだ。言葉を知ることが、目に見えないモヤモヤに輪郭を与えるのだと改めて思いました。

――新刊の小説『タラント』では、主人公の女性がボランティアで難民キャンプや途上国を訪れるシーンがありました。しかし、支援活動に参加すると〝いい人扱い〟されてしまう…。このような主人公の葛藤が描かれていましたが、角田さん自身も同じような思いで悩んだことがあるのでしょうか？

角田 私個人というより日本社会を見ていると、良い行いをすることに対して、なぜこんなに自己嫌悪とかためらい、恥ずかしさを伴うのだろうと不思議に思うことはありますね。その理由をずっと考えていて、ひとつは日本の宗教観ではないかと思っています。その一方で、日本でも若い世代はフェアトレードのものを買ったりボランティアに参加したりと、ごく自然に地球に良いことをしようとしている。だから未来は変わっていくと希望を感じています。

ゴミを拾うことも その人ができる使命

――『タラント』では戦争もひとつのテーマでした。ウクライナ危機をどう受け止められましたか？

角田 驚きましたし非常に心配です。そして、ウクライナのことがニュースで大きく取り上げられる分、ミャンマーなど他国のことが報道されなくなったりしているので、それも気にかかっています。

――戦争という大きな出来事を前に、自分の無力感を感じている人もいると思います。何かアドバイスはありますか？

角田 世界のために自分ができることって、何か大きなことを想像しがちです。でも、目の前の赤ん坊を泣き止ますとか、ゴミが落ちていたら拾うとか、そういうささやかなことも使命だしその人の才能だと考えます。そんなことを考えながらこの小説を書きました。あと、戦争の映像を見て心が傷ついたり、これ以上知るのが怖いという人もいると思います。そういう人には、もう本当に無理しないでって伝えたいです。

――プランの支援を始められた当初は、角田さんも無力感を抱いたり支援に懐疑的な気持ちがあったとうかがいました。

角田 そうなんです。でも視察でのある出来事をきっかけに、迷う気持ちはなくなりました。マリで、女性性器切除（ＦＧＭ）から女の子を守るための会議をしていたときのことです。デリケートな話なので、男の人は一人だけだったんです。彼に「女性のなかに男性一人で嫌じゃないんですか？」と尋ねたら、「仕方ないよ、関わっちゃったんだから」というように返された。それを聞いた時、私も開き直ったというか（笑）。あれこれ支援の意味や理由を考えるのはやめようと思いました。それ以前は、例えば1万円を寄付して、それが手数料とか色々取られて少額しか現地に届かなかったらあまり意味がないのではないか、と悩んでいたんです。でも、その男性の言葉をきっかけに、たとえ1円だけでも0円よりは届いた方がいい。大義名分がどうとかあれやこれや考えるのではなく、とにかく動けばいいと気づきました。

――プランの支援者として、次の目標や夢を教えてください。

角田 コロナ禍で延期になってしまった、ロヒンギャ難民キャンプをぜひ訪れたいです。現地の人の話をたくさん聞いて、学びを深めたいですね。そして、プランの活動をこれからも応援したいです。ウクライナ危機のような事態が発生したときに、何かしなくてはとは思うけれど、寄付をするといっても色々な窓口があって、迷ってしまうという人が多いと思うんです。そういうときのひとつの受け皿に、プランがなれればいいですよね。こんな寄付の方法があるということを積極的に伝えることも、プランの大切な役割だと思います。



誰よりも影響を受けるのは子どもたち ～ウクライナ避難民緊急支援～

紛争が激化するウクライナからは、多くの人々が近隣諸国へ避難しています。こうした危機的な状況下では、子どもたち、特に女の子や女性に対する暴力、人身取引や性的搾取などのリスクが高まることが明らかになっています。そのため、プランは一貫して「子どもや女の子、女性の心身を守る」ことを最優先に、ポーランド、ルーマニア、モルドバの３カ国で避難民の❶心のケア、❷子どもの保護、❸緊急下での教育の３つの分野に取り組んでいます。

6月10日までの1カ月間、私が支援活動に従事したルーマニアでは、避難民3,000世帯を対象に生活物資やレクリエーション用品の支給や、2,600人に学用品や学習する場の提供、支援にあたるスタッフやボランティア1,000人以上に必要な研修などを行っています。プランは今後も各国のパートナー団体と連携し、子どもたちが安全に過ごし学べる環境を整えられるよう、活動をすすめてまいります。



プログラム部 **山形 文** 職員

卒業したチャイルドのストーリー

スポンサーとの交流で、人生に立ち向かう勇気をもらった

プラン・スポンサーシップは、途上国の子どもたちの環境を改善し、未来を開く支援です。チャイルドと呼ばれる子どもたちは、地域で行われる活動に参加しながら支援者と手紙で交流し、地域の状況を伝える役割を担っています。プラン・スポンサーシップが終了した後も、プラン・インターナショナルとともに地域の子どもたちや同世代の仲間のために活躍している元チャイルドもいます。今回は、2013年までプラン・スポンサーシップに参加していたカンボジアのトートさんが、チャイルドだった頃の思い出、そして今の夢について語ってくれました。



チャイルドだった頃の写真を手にするトートさん

障害のためにいじめられた過去

カンボジアに住む26歳のトート・ホーリーさんは、生まれつき左手に障害があります。幼いころは、障害のない子どもたちがうらやましかったといいます。「片手で自転車に乗って学校に行くのも大変だったし、いじめにもあってなかなか勉強したくなくなったこともありました。でも、あ る時、まわりの人が思っている以上に、自分にだってできることがあるということをみんなに見せよう、と思ったのです。いつも『私はもっと頑張れる』と自分に言い聞かせていました」。

牛の世話をしながら家で勉強をした

トートさんの両親は農業で生計をたてていますが、読み書きをすることができません。父親は「若い頃は学校に行きたくても行けなかった。だから、自分の子どもたちにはその機会を与えたかったのです。8人いる子どもたちは全員学校に通わせましたが、中途退学することなく高校まで卒業できたのは、トートただ一人です」と、トートさんを誇りに思っています。母親は「トートは牛の世話をするときでさえ、本を読んでいましたよ」と、笑いながら当時を振り返ります。

2002年にプランがカンボジアで活動をはじめてまもなく、トートさんは村で最初のチャイルドになりました。「10歳のとき、スポンサーであるドイツ人のご夫婦から初めて受け取った手紙を、いまでも大切に持っています。手紙では、私の村の様子や、日々の暮らしのなかで食べているもの、何をして過ごしているかなどを伝えました」。

教育はよりよい人生を送るカギになる

高校卒業後、トートさんは首都のプノンペンでの進学を希望していました。しかし、体の不自由な彼女にとって、交通量が多く、家族のサポートを受けられない場所で生活することは難しく、やむなく諦めました。現在は教師として働き、昼間は自宅から8キロ離れた小学校まで原付バイクで通っています。夜は近くの大学で学びつつ、村の子どもたちに無料で英語を教えています。その理由について「教育は、子どもたちがよりよい人生を送るためのカギになります。そして私の村はアンコールワットにも近いので、観光業は重要な生計手段です。英語の知識を身につけることが、将来役に立つということを子どもたちに伝えたいです」と話します。



スポンサーからの手紙を今も大切にしています



小学校教師としてクメール語を教えるトートさん



生まれ育ったコミュニティで英語のレッスンを実施







（上）トートさんが生まれ育った村の様子
（右）カンボジアの現状についてスピーチするトートさん
（中）フィンランドでプランの職員やユースとともに
（左）小学校の図書館で子どもたちと

フィンランドで〝一日大臣〟を体験

2019年、トートさんにもう一つの転機が訪れます。10月11日の国際ガールズ・デーに、プランのアンバサダーとしてフィンランドに招待され、気候変動に関するイベントに参加したのです。「フィンランドの女性閣僚のポジションの〝一日大臣〟として、いろいろな会議に参加しました。大臣の仕事はとても忙しく、特にスタッフとの連携が大切で、高い知識、経験、優れた管理能力、リーダーシップが必要であることを学びました。また、フィンランドの人々が法律を尊重している点など、カンボジアの人々が学ぶべきことが多くあると感じました。異文化やいろいろな人との出会いは、素晴らしい経験となりました」。

将来の夢は高校の先生になること

最後にトートさんに将来の夢について質問すると、しばらく考えてからこう答えました。「具体的な夢を描くのは難しいですが、明確な目標はあります。2023年には大学を卒業できる予定なので、その後は高校の教師になって大好きな英語とクメール文学を教えたいです。そして、コミュニティでの無料の英語レッスンを続けたい。私が生まれ育ったコミュニティでは、たくさんの子どもたちが途中で学校を辞めてしまいます。特に、女の子は早すぎる結婚により中途退学をすることが多いです。子どもたちに、勉強することの大切さと、よい教育が家族の生計向上にもつながることを伝えていきたいです」。

日本のスポンサーの皆さまへ



プランの活動に参加して、自分の障害を恥じたり、見捨てられたと感じたりすることがなくなり、自分の人生に立ちむかう勇気が湧きました。特に、スポンサーからのお手紙を読むのはとても楽しくて、私のことを大切に思ってくださることが感じられ、励まされました。きっと、ほかの子どもたちも私と同じだと思います。日本のスポンサーの皆さまには、子どもたちがよりよい人生を送れるように、励ましていただけたら嬉しいです！最後になりましたが、スポンサーの皆さまの健康とご活躍をカンボジアからお祈りしています。

ブルキナファソ

人身取引に巻き込まれた女の子たちがダメージを乗り越え人生を取り戻すために

ブルキナファソでは、国内および近隣国へ子どもが売られてしまう人身取引の問題が深刻です。
プラン・インターナショナルは2019年7月から、南西部のポニ活動地域で
「女の子が売られない社会づくり」プロジェクトを開始。人身取引の被害にあった子どもたち、とりわけ女の子たちが、
必要とするケアや職業訓練を受け、地域での生活を取り戻すことを目指しました。
本プロジェクトのこれまでの成果についてご報告します。



ブルキナファソがかかえる問題

サハラ砂漠の南に位置する内陸国。子どもが全人口の約半数を占めています。貧困層の多くが農村地域で暮らしていますが、厳しい自然環境のなか農業生産性は低く、食料不足が生じています。このため、「よい仕事がある」「教育を受けられる」といった人身取引業者の誘い文句に、貧困家庭の親や子どもたちが容易にだまされてしまうケースが多発しています。



「アフリカ子どもの日」に実施した、子どもの保護に関するイベントに参加する子どもたち

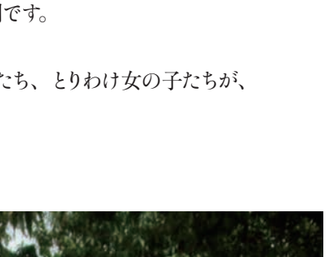
子どもたちに深刻な心身のダメージを残す人身取引

人身取引に巻き込まれた子どもたちの多くは、労働搾取を受けて健康を害したり、精神的なトラウマを抱えたりします。また、無事に救出されたとしても、十分な教育を受けていないため、経済的に困難な状況に陥りがちです。

なかでも女の子は性産業に従事させられたり、雇用主による性搾取の被害にあうことも多く、望まない妊娠をしたりHIVに感染したりと、より深刻な状況に陥るリスクが高いため、特別なケアが必要とされます。

プランは本プロジェクトを通じて、人身取引の被害にあっている子どもや被害の可能性がある子どもを救うための活動を実施。警察と連携してパトロールを行うなど、子どもたちが保護者のもとに安全に帰ることができるように支援してきました。

同時に、被害にあった子どもたち、とりわけ女の子たちに対して、必要とするケアや職業訓練を提供し、地域での生活を取り戻してもらうことにも力を注いできました。さらに、人身取引が発生しにくい環境づくりも欠かせないため、生計向上を促す職業訓練の提供、子どもたちの出生登録の促進、人身取引に巻き込まれないための意識啓発活動、州行政への提言などを行ってきました。



プロジェクトを実施している地域の様子

コミュニティのオピニオンリーダーを対象とした啓発活動



「女の子が売られない社会づくり」プロジェクト

実施期間：2019年7月～2022年6月
※人数は男の子も含む



イラストを使って、誰にでもわかりやすく人身取引について説明

これまでの成果

人身取引から救出され、心身のケアを受けたのちに保護者のもとに帰還した子どもの数 ⇨ **71人**

人身取引防止のため出生登録を完了した子どもの数 ⇨ **500人**

職業訓練を受けた子どもの数 ⇨ **148人**

自分の身を守るため、性と生殖に関する健康と権利や、人身取引に関する意識啓発活動に参加した子どもの数 ⇨ **252人**

人身取引について話し合う集会の開催数（参加者総数1,320人） ⇨ **74回**

アマルさん（仮名／16歳／女性）のストーリー

アマルさんは7人中5番目の子どもとして生まれました。小学校に入学しましたが、家庭には経済的余裕がなく、間もなく中途退学。以来、学校には通っていません。

ある日、知らない男性から「町で働けば苦しい生活から抜けだせる」と声をかけられ、親に内緒で、友だちとともにバスで近くの町に行きました。このとき、自分が人身取引に巻き込まれているという自覚はまったくありませんでした。

2021年2月、彼女と友だちを含む3人の女の子は、警察と治安部隊のパトロール中に発見され、人身取引の被害者として保護されました。その後アマルさんは、州行政と連携しているプランの子どもの保護担当官に作業所を紹介され、作業所でも家庭でも、他者の模範となるような行動を身につけていきました。

「私は縫製を教えてもらいながら、快適に過ごしています。今では子ども服の簡単な裁断と縫製ができるようになりました。人身取引の被害にあった私を救い出し、職業訓練の機会を与えてくれたプランに感謝しています。いつか自分でビジネスを始められるよう、根気よく学んでいきます」。



アマルさんの親も作業所の責任者も、彼女の成長をとても喜んでいます

「ガールズ・プロジェクト」のご支援をお願いします

「女の子だから」というだけの理由で差別や偏見を受け、有害な慣習の犠牲になる女の子たちを守ります。同時に、女の子たちが力をつけ、自分や家族はもちろん、地域社会や次世代にまでポジティブな変化をもたらす主体者となるためのサポートをします。

ご寄付や活動詳細についてはウェブサイトをご覧ください

現地担当者からのメッセージ

プロジェクトを通じて多くの変化が起きています



ソムダ プルチェリアさん
パートナー団体 子どもの保護担当

私は、コミュニティ・リーダーが正しい知識を得て、人身取引を終わらせるための活動に参加する姿をたくさん見てきました。人身取引から救出され帰還した際に、子どもたちが健康でいてくれたことに安堵し、喜ぶ親の姿が印象に残っています。親やコミュニティの人々は、子どもたちが職業訓練を受け、未来にむかっている姿を見て、プロジェクトへの感謝を口にします。私たちの活動が確実にコミュニティに役立っているとの実感が、私のモチベーションになっていました。プロジェクトの活動を通して多くの変化が起きています。日本の支援者の皆さまに、心からの感謝の気持ちをお伝えします。

illustration by Noriyuki Goto

ソマリア

干ばつにより失われた学びの機会
14歳のハワが再び学び始めるまで

「アフリカの角」と呼ばれるソマリアを含むアフリカ大陸東部の地域は、気候変動の影響などで深刻な干ばつに苦しんでいます。ソマリアのプラン・インターナショナルは、水の提供や現金給付などの緊急支援を行っていますが、干ばつは子どもたちの教育にも影響をおよぼします。プランの新しいプロジェクトについてお伝えします。



ソマリアのプランで働くヤスミンは、給水車で地域の水汲み場に水を届ける仕事をしています。ある日、ヤスミンはハワという14歳の女の子と出会いました。

ハワは、7歳の妹と3歳の弟を連れて水汲み場に来ていました。しかし、水を受け取るまでに数時間も長い列に並ばなくてはなりません。いらだった大人に割り込まれたり、暴言を受けたりして、妹と弟は泣き出してしまいました。



ヤスミンはハワたちにそっと近寄り、「保護者はどうしたの？」とたずねました。ハワの話によると、干ばつにより、育てていた家畜400頭をすべて失い、仕事と水を求めて一家で移住してきたとのこと。そのため両親が仕事を探している間、妹と弟の世話や食事の支度、水の確保をするのがハワの役割になっていました。

水の供給がない日は、5時間以上かけて別の水源に出かけます。その帰り道、知らない男性に声をかけられ怖い思いをしたこともあり、「できれば行きたくない」というのがハワの本音でした。



ハワはほかにもいろいろと話してくれました。引っ越してから、ずっと学校に通えていないこと。以前通っていた学校では、学校に来る先生や友だちがどんどん減っていったこと――先生も自分の家族の食料や水を確保するのに精一杯だったのでしょう。

また、家計の負担を減らすために、望まない結婚をさせられた友だちもいました。ハワは学ぶことが大好きだったのに、「その気持ちがなくなってしまった」とヤスミンに話しました。





ヤスミンは、水の供給などの緊急支援に力を入れる一方で、干ばつにより子どもたちの教育が途絶えてしまわないための対策にも取り組むべきだと思いました。

そこで、ハワのように学校に行けなくなってしまった子どもたちが、学習の遅れを取り戻すための補習授業や学用品の支給、学校での給水車による水の供給などをすすめました。さらに、子どもたちが早すぎる結婚や暴力に巻き込まれることがないよう、地域の人々への啓発活動も始めました。



ヤスミンは、再びハワに会いに行き、補習授業への参加を促しました。ハワの両親には、学用品が支給され無料で学べることを伝え、両親が家に戻った数時間だけハワが授業に参加できるよう承諾をもらいました。

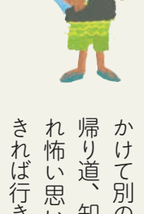
毎日、水の確保に追われ、妹と弟の面倒ばかりみていたハワにとって久しぶりの授業はとても楽しく、「やっぱり学び続けたい」と強く思いました。水不足の状況は続いていても、「私には学ぶ場所がある」ということがハワの心の支えになっています。

新しいグローバル・プロジェクトがスタート！

● 学びを止めない

「干ばつ危機下の子どもの教育」プロジェクト（ソマリア）

詳細はウェブサイトをご覧ください



干ばつや食料危機下でも子どもたちには教育を受ける権利があります

解説：プログラム部　道山 恵美 職員

ソマリアではここ2年以上、まとまった雨が観測されていません。雨不足は農作物の不作に直結し、飼料も育ちません。多くの人々がハワの家庭のように生計手段の家畜を失いました。新型コロナウイルス感染症の影響で経済活動は停滞し、雇用も限定的です。さらに、ウクライナの紛争による物価高で貧困世帯は食料や日用品の入手すら困難です。弱い立場の人ほど気候変動や干ばつ、紛争などの影響を強く受けています。

国際社会が「アフリカの角」地域への支援を始めていますが、栄養や食料支援に注力する一方、子どもたちの教育問題は後回しになりがちです。プランの活動地域でも、水が確保できず100校以上が休校しています。教育の中断期間が長びくと、教育をあきらめる子どもは増加します。教育を受けられなかった世代をつくらず、子どもたちが望む将来を手に入れるためにも「干ばつ危機下の子どもの教育」プロジェクトにご支援をお願いいたします。



株式会社ポーラ
サスティナビリティ推進室
駒 祐介さん

国内のジェンダーギャップ解消を目指し アドボカシー活動に力を注ぐ

国内のジェンダー課題に対するプラン・インターナショナルのアドボカシー活動に共感し、
国際女性デーで寄付とジェンダーに関する社内研修を実施してくださった株式会社ポーラ。
老舗の化粧品会社ならではの課題意識と解決に向けた取り組みについてお話をうかがいました。

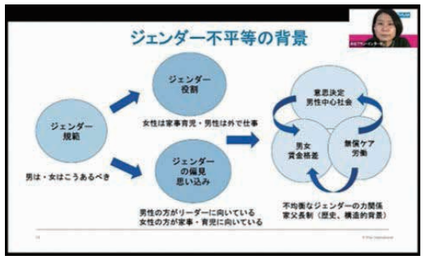
サステナビリティ推進の一環として寄付を実施

1929年創業のポーラは、その8年後に初めてのセールスウーマンが誕生して以来、女性活躍企業としての歴史を刻んでいます。現在では全従業員の約4分の3が女性であり、2020年には日本の大手化粧品会社で初めて、女性の代表取締役社長※1が率いる企業となりました。

ポーラでは、ジェンダー・年齢・地域格差といったさまざまな「壁」を解消することをサステナビリティ（持続可能性）のゴールとして掲げ、昨年、その推進を担う「サスティナビリティ推進室」を立ち上げました。そして、今年3月8日の国際女性デーにあわせて寄付を行うことを決め、プラン・インターナショナルを選ばせていただきました。その理由は、途上国への支援だけでなく、国内のジェンダー課題に対するアドボカシー※2活動もきちんと行っていることに感銘を受けたから。日本はジェンダーギャップ指数※3が先進国のなかでも最低レベルであることが毎回話題になりますが、そうした自国の課題を具体的に知ることは、途上国支援など世界の課題に目をむける際にも、とても大切だと考えています。



（上）地域からジェンダー課題を発信することが期待されるビューティーディレクターの皆さん（下）研修では、ジェンダー課題や女性のリーダーシップなどについて議論しました



大きな気づきがあったジェンダー研修

国際女性デーには、プランの職員の方にファシリテーターをお願いし、ジェンダー課題意識向上のための研修も開催しました。当日参加した社員（男女比は3対7）からは、「ポーラで働いていると気づきにくいが、まだ課題がある」「ジェンダーバイアスの具体例を自分で思いつくことができなかったが、それはジェンダー平等の意識が低いせいなのだと感じた」「男性がもつ無意識のバイアスの強さを感じた。意思決定層に女性を増やす必要がある」「リーダーになりたくないという女性が多くいることも事実。その理由を深堀りしなければ」などの感想が寄せられました。

この研修の様子を収めた動画はその後、「日本女性のリーダーシップについて」というタイトルで1300人あまりの社員と、約3万3000人のビューティーディレクター（全国のポーラショップで働く人々）に公開。ジェンダーリテラシーを高める教材として活用しています。

ポーラの強みを生かしイノベーションを！

現在、ポーラの女性管理職の割合は3割ほど。社長は「意思決定の場に女性が少ないということは、会社としてそれだけ機会損失している。多様な意見が出やすい状況を作るには、3割はまだまだ少ない」と話します。日本の女性は自己肯定感が低い人が多いとされているので、そこを改善し、より多くの女性にリーダーをめざしてもらうことも重要です。

こうした課題をクリアするには時間がかかりますが、ポーラには本社だけでなく、ビジネスパートナーの拠点が全国に約3200あり、それぞれに女性リーダーがいます。この強みを活用して同時多発的に発信できれば、真の多様性のメリットが現れ、イノベーションも起きやすくなるのではと画策しています。同じ志をもつプランとも、また何か一緒にできる企画はないかと考えをめぐらせています。

※1　2020年1月に及川美紀氏が代表取締役社長に就任
※2　社会問題の実態を調査し、人々に広く関心をもってもらい、政府や国際機関などに解決のための働きかけを行う活動のこと
※3　世界経済フォーラムが発表している指数。日本は世界156カ国中120位（2021年）だった



野島妙子さん

途上国支援に尽力した父の遺産で ベトナムの小学校の環境を改善

プラン（当時は「フォスター・プラン」）の日本事務局が設立された1980年代から、
母娘二代にわたって支援を続けてくださっている野島妙子さん。
アジアの人材育成に力を注いだお父さまの思いが、
ベトナム・ハザン省の小学校整備へと結実するまでのストーリーを語っていただきました。

途上国との交流や支援に熱心だった両親

1980年代の半ば頃、母が「こんなのを始めたのよ」と見せてくれたのは、「フォスター・プラン」で交流を始めたインドの男の子の写真でした。このとき、「私も生活に余裕ができたら絶対にやろう」と思い、1996年からケニアの女の子との交流を開始。その後もフィリピンの男の子、ベトナムの男の子、現在はベトナムとネパールの女の子と交流を続けています。

一方、父は、政府の技能実習制度が始まるよりもずっと前の1970年代から、インド、ビルマ（ミャンマー）、ベトナムなどから若者を呼びよせ、自動車修理等の技術を身につけて帰国してもらうという活動をしていました。私が若い頃には、いろいろなアジアの人たちが自宅に出入りしていたのを覚えています。

その両親もこの世を去り、実家に暮らす人が誰もいなくなりました。仕方なく売却したものの、ずっと父に申し訳ないという気持ちを引きずり、「父の思いを何かの形にしたい」と考えていました。あるとき、『プラン・ニュース』に掲載されたオーダーメイド・プロジェクトの記事を発見。まさに「これだ！」と思い、事務局に連絡しました。

プロジェクト後も残る成果いい供養になりました

支援プロジェクトには、「ベトナムの教育関連を」とお願いしました。実は15年ほど前、ベトナムのハノイで日本語を教えている友人のもとを訪れ、一週間ほど授業で教えたことがあるのですが、そのときの生徒さんたちが本当に一生懸命勉強していて、口々に「将来は国をよくするために働きたい」と話すのに大感激。私も「この国のために何かしたい」と思い、プラン・スポンサーシップでもベトナムの子どもたちと交流するようになったほか、ガオ村スクール・スポンサーシップ※1にも参加しました。

今回、私が支援することになった「小学校の教育環境改善プロジェクト」は、偶然にも交流しているチャイルドが暮らす活動地域で実施されています。2021年7月から約1年間で新しい教室やトイレを作り、備品をととのえ、新型コロナウイルス感染症の意識啓発活動も行われています。なかでも私が感銘を受けたのは、少数民族の子どもたちが多いこの地域で、彼らが質の高い教育を受けられるよう、先生方への教授法指導に力を入れていること。プロジェクトが終わったあとも成果が残り続ける――きっと父も母も喜んでくれるに違いない、本当にいい供養になったと思います。



感染予防の意識啓発活動で、手の洗い方を学ぶ子どもたち



教師たちは、少数民族の子どもたちに教える際に必要な配慮や指導技術をを学びます

プロジェクトは順調にすすみ、今年6月には落成式が行われました。コロナ禍のため、現地に行けないのは本当に残念なのですが、私もメッセージを送らせていただきました。

今回のことを周囲の人たちに話すと、「そんなことができるの？」と興味をもってくれる人がたくさんいます。終活を真剣に考え始める世代でもありますが、こういった支援方法があることは、まだまだ知られていません。プロジェクトで完成した学校の写真を見せながら、財産の生かし方の一つとして多くの人に広めていきたいと思います。

※1　2008～2021年に実施されていたプロジェクト。学校を拠点に生徒たちが複数のスポンサーと交流したほか、教育・学習環境を改善するための支援活動が行われた

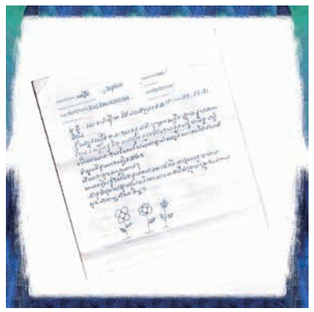


＼ プランの活動をSNSで発信しています！ ／

「寄付は特別なことではない」という思いと支援の輪を広げていきたいです

カンボジアのチャイルドと交流中の川島さんは、ご自身のSNSなどでチャイルドのお手紙やプランでの支援などについて発信してくださっています。交流に対する思いについてうかがいました。

スポンサー **川島 塁さん**
チャイルド **ソピアさん（11歳）／カンボジア**



ソピアさんから手紙が届いたことを、SNSで報告したときの写真。チャイルドのフルネームやSP番号がわからないように工夫してくださっています

飲食店の売上の一部で支援を続けています

私が1年以上交流を続けているのは、カンボジアに住むソピアさんです。経営している飲食店の売上の一部を支援にあてていて、同時に店頭やSNSでもプランのことについて積極的に広めるようにしています。

プランを知ったきっかけは、1年半くらい前に放送されていたテレビCMでした。そしてその後、チャイルドと手紙のやりとりができることを知り、とても魅力を感じました。

本来こうした支援には見返りを求めるべきではないのでしょうが、何らかの反応があったほうが楽しく続けられると思ったのです。たとえば募金箱に寄付をしても、その先がわからないと〝寄付しただけ〟になってしまいますが、プランの場合は支援の内容やお金の使いみちが手紙やレポートで目に見えるため、寄付のし甲斐があります。

私は学生時代、福祉系の大学に通い、タイの孤児院で数週間ボランティアをしたことがあります。その経験からも、ボランティアは現地で活動するのがベストなのでしょうが、コロナ禍では、なかなかそうもいきませんよね。そんななかでも、寄付をすることで手紙のやりとりなどの反応が得られるプランの活動は、仕事で忙しいことが多い日々でも精神的な充足感を与えてくれています。

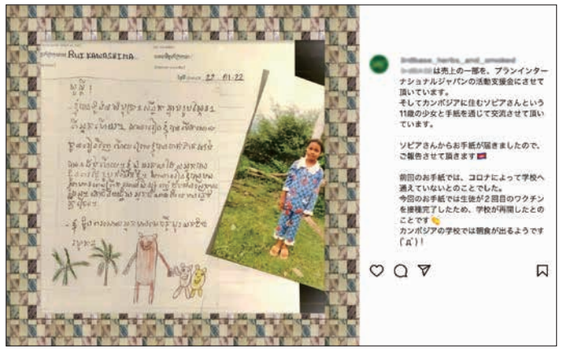
お客さんと会話のきっかけになることも

プラン・スポンサーシップが他の支援団体と違うのは、やはりチャイルドと手紙のやり取りができることです。「長くお休みだった学校が再開されました」とか「学校で朝食を食べています」という生の声とともに、写真のソピアさんが少しずつ大きくなっていて、成長の様子が実感できるのがいいですね。

支援額にすると1日あたり約100円ですが、飲食店経営を継続するためのモチベーションのひとつにもなっています。

ソピアさんとの手紙の一部をSNSに載せたり、店頭に募金箱やポスターを掲示したりすると、常連のお客さんが「何それ？」「募金したい」などと興味をもってくださることがあります。SNSでの発信の仕方にはルールがあるので、その点は十分注意しています。

このように発信を続けていくことで「寄付は決して特別なことではない」と伝えたいし、私のお店からさらに支援のルートが広がってくれればいいなと思っています。



発信の際には、お手紙と写真の感想も添えて。「1年前より大きくなっていることも伺えます。右だけ腕まくりしているので、何か家事を手伝っていたのではないかと予想。そもそもが『手伝う』という概念ではないのかもしれません」

チャイルドとの交流を発信しませんか

チャイルドとの交流で感じたことや嬉しかったこと、チャイルドからの可愛いお手紙などを、SNSなどでご紹介ください。支援の輪を広めることにつながります。 投稿する際は、ぜひハッシュタグ「＃プランインターナショナル」をつけてください。また、チャイルドとその家族のプライバシーと安全を守るため、以下にご協力ください。

〈SNS投稿の際の注意点〉

ご紹介いただける情報	ご紹介いただけない情報
●チャイルドのファーストネーム	●チャイルドのフルネーム
●チャイルドの写真	●チャイルド番号
●住んでいる国	●住んでいる地域

※プランは子どもと若者の安全を守るためにセーフガーディングポリシーを定めています。詳しくはウェブサイトをご確認ください。

アドボカシー

「ジェンダー・ステレオタイプ」について ユースと教育現場からの意見 ～オンラインイベントを開催～



オンラインで行われた
パネルディスカッション

2022年5月、「ジェンダー・ステレオタイプ※」に関する調査レポートの発表を記念したオンラインイベントを開催し、100名を超える方々にご参加いただきました。イベントでのパネルディスカッションには、現役の高校生やユース、教員が参加し、ジェンダー・ステレオタイプの実態や教育現場の課題について意見を交わしました。

「女の子だから家事をしなさい」、「男の子だから泣いてはだめ」。日本の高校生が、こうした発言に接する機会がもっとも多い場所として挙げたのは「学校」という調査結果に対し、ユースからは「教育現場の責任は重いのではないか」との意見があがりました。教員からは、「教員自身がこれまでジェンダー不平等な環境におかれてきており、その結果ジェンダー・ステレオタイプを再生産している可能性がある」との意見が出されました。さらに「日本の高校生は自己肯定感が低く、周りの目を気にするため、ジェンダーなどの多様性を認めづらいのではないか」との指摘がありました。

こうした課題の解決にむけたヒントとして、教員のジェンダー意識を高めること、生徒の自己肯定感を育むこと、自分自身が当事者であると気づくきっかけづくりなどがあげられました。自己肯定感を育むためには周囲の大人、特に教員や保護者が高校生の持つ能力や可能性を引き出し、積極的に評価する必要があります。

プラン・インターナショナルは、引き続きユースや学校関係者との対話を通じ、この問題に取り組んでいきたいと考えています。

※ジェンダー・ステレオタイプとは：社会に広く浸透している、ジェンダーに基づく固定観念や思い込み、偏見のこと

ユース
グループ

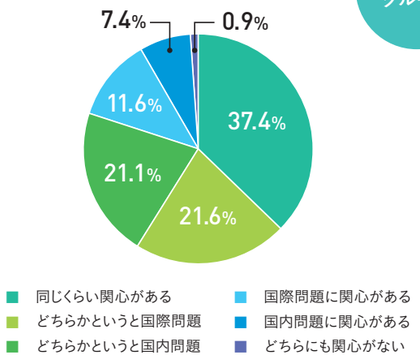
プラン・ユースグループがZ世代を対象にアンケート調査を実施

プランとともに活動するユースグループでは、アドバイザリーチームが若者の視点からプランの事業運営に関するアドバイスを行っています。

今年4月、Z世代とよばれる12～25歳の若者を対象にアンケート調査を実施しました。この調査では日本の若者の社会問題や国際NGOへの関心をテーマとしており、調査結果からZ世代は社会問題への関心が高く、国内問題と国際問題に同等の関心をよせていることなどがわかりました。

今後、調査結果や分析・考察をプランの役職員に共有し、事業方針にいかすよう提案する予定です。

国内問題と国際問題、
どちらにより関心がありますか



COFFEE BREAK 職員が紹介するカルチャー

ヨルダンで受け継がれるパレスチナ刺繍

広報マーケティング部
稲井 あずさ 職員

ヨルダンは、国民の半数以上が中東戦争などを逃れて避難してきたパレスチナ難民やその子孫であるとされており、国内にいくつかあるパレスチナ難民キャンプを中心に、文化や伝統が受け継がれています。なかでもパレスチナ刺繍は、パレスチナの町や村ごとに独自のデザインがあり、とても美しく繊細です。ヨルダンで私に刺繍を教えてくれた女性も、美しいデザインを眺めながら、まだ一度も帰れたことのない自身の故郷に思いを馳せていました。



パレスチナ刺繍の手仕事は、難民キャンプでの生活を支える技術にもなっています

40周年アンケートへのご協力、ありがとうございました

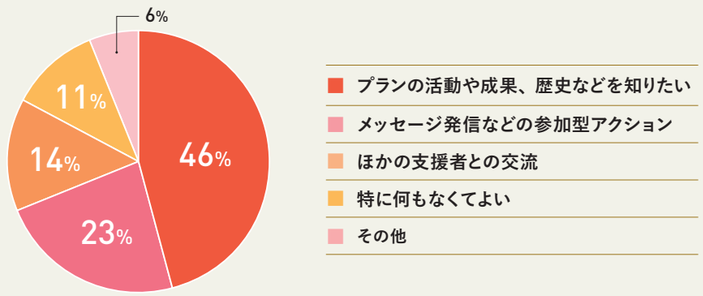
2023年5月、プランは日本での設立40周年を迎えます。これも皆さまからの温かいご支援のおかげと、あらためて感謝申し上げます。

40周年は支援者の皆さまにも意義ある機会としていただきたく、2022年2月、メールアドレスを登録されている支援者の方々にオンラインのアンケートをお送りしました。約1,500人の方からいただきました回答の一部をご報告します。

期待することとして、「プランの活動や成果、歴史などを知りたい」が回答の約半分を占め、「参加型アクション」「ほかの支援者との交流」と続きました。

一方で40周年の企画は「特に何もなくてよい」というご意見も。他にもお寄せいただいた多くのアイデアやご意見をふまえ、皆さまにより深くプランを理解いただき、まだプランを知らない多くの方々にも知っていただける企画を目指して取り組みます。詳細が決まり次第、お知らせします。ご協力くださった皆さま、ありがとうございました。

40周年に期待すること（複数回答）



プラン支援者の会からイベント開催のお知らせ

あなたも参加しませんか？

「プラン支援者の会」は、全国各地の支援者の皆さまが任意で活動を行っています。「ほかの支援者のみなさんと話がしたい」「志を同じくする方々と楽しく活動したい」とお考えの方、お近くのプラン支援者の会に参加してみませんか？

W ウェブサイト f フェイスブック
上記アイコンのある会については、以下のプラン・インターナショナルウェブサイトから、各会のページにリンクできます
https://www.plan-international.jp/supporter/plankai

※新型コロナウイルスの感染状況によっては断りなく中止となる場合があります。

プラン名古屋の会 W f

プラン名古屋30周年の会
- 日時：8月27日(土) 10時～13時
- 会場：ソレイユプラザなごや　研修室
  名古屋市中区栄1-23-13 伏見ライフプラザ12階
- 内容：池上理事長を迎えて、プラン名古屋の会30周年の記念講演会と支援者の交流会
- 参加費：500円
- 連絡先：久世

Mail: info@plan-nagoya.sakura.ne.jp
電話: 080-6952-3170

プラン山陰の会 f

映画観賞会
- 日時：10月2日(日)　①10時～12時　②14時～16時
- 会場：鳥取県人権ひろば21 ふらっと　鳥取市扇町21番地
  鳥取県立生涯学習センター(県民ふれあい会館) 2階
- 内容：映画上映会「難民キャンプで暮らしてみたら」
- 参加費：無料　※要事前申し込み、人数制限あり
- 申込締切：9月30日(金)
- 連絡先：岡川

Mail：yumiko0840@icloud.com

多摩SP会 f

職員報告会
- 日時：10月10日(月・祝) 15時～17時
- 会場：立川市子ども未来センター　201会議室
  立川市錦町3-2-26
- 内容：未定(国際ガールズ・デー関係を予定)
- 参加費：無料　※要事前申し込み
- 連絡先：矢島

Mail：tama-web3@ngo-npo.org

プラン千葉 W

秋の例会
- 日時：10月16日(日)　13時15分～16時30分
- 会場：千葉市民会館　会議室　千葉市中央区要町1-1
- 内容：チャイルドへの手紙書き　ほか
- 参加費：500円
- 定員：先着30名(感染防止のため定員が15名になる可能性があります)
- 申込締切：10月14日(金)
- 連絡先：前田

Mail：e_maeda@yellow.plala.or.jp

■ 支援者の会に関するお問い合わせ先：
プラン・インターナショナル支援者の会担当 Mail: P-kai@plan-international.jp

※「プラン・ニュース」No.121は、2022年10月上旬にお届け予定です。

ウクライナ避難民緊急支援 ご協力をありがとうございます



ウクライナでの戦闘行為の激化により近隣諸国に避難したウクライナの人々を支援するために、プランは2022年3月より寄付を募集しています。5月末時点で3,407件のご寄付を頂戴しました。皆さまのご協力に心より感謝申し上げます。

今回の支援を通して、プランは多くの避難民を受け入れているポーランド、ルーマニア、モルドバにて、支援のニーズ調査を行い、現地のパートナー団体と連携して現地のニーズに則した活動を行っています。例えば、ルーマニアでは、教育アプリなどがインストールされたタブレット端末100台を提供し、子どもたちが教育を継続できるよう支援しています。また、モルドバでは、国立児童虐待防止センターと連携し、心理士、教師、ソーシャルワーカーからなるプランの専門チームが、心理社会的ケアのセッションを実施しています。

引き続き、子どもや女性たちが避難先でも安心・安全に過ごせる環境を整えられるよう活動をすすめてまいります。「ウクライナ避難民緊急支援」は8月末までご寄付を受け付けております。皆さまのお力添えをどうぞよろしくお願いいたします。

活動の最新情報は、随時ウェブサイトをご確認ください。

https://www.plan-international.jp/

ACジャパンの支援による広告がスタートしました

プラン・インターナショナルは、公益社団法人ACジャパンの支援キャンペーンに選出されました。2022年7月より、テレビや新聞、ラジオ、雑誌、交通機関において、プランの広告が掲示されます。

広告のテーマは、「I am a child, I have a child.（私は、まだ子どもです、でも、もう子どもがいます。）」世界では、約5人に1人の女の子が18歳未満で結婚をしています。早すぎる結婚が女の子たちから教育の機会や社会に参加する機会を奪い、また早すぎる妊娠、出産によって命の危険にもさらされています。

この広告を通して、多くの方が女の子たちの置かれた状況を知り、プランの活動への関心を高めてくださることを心から願っています。

住所などのご登録情報の変更はお早めにお手続きください

住所やメールアドレスなどのご登録情報に変更があった方はぜひ変更手続きをお願いいたします。変更にはウェブサイト内「お問い合わせフォーム」が便利です。チャイルドからの通信物や事務局からのご連絡など、滞りなくお届けできるようつとめますので、ご協力をよろしくお願いいたします。

お電話でのお問い合わせ：
03-5481-6100
（月～金　9:00～17：30　土日祝を除く）

マイ・プラン・ページのアカウントをお持ちの方

マイ・プラン・ページにログインの上、ご変更ください

マイ・プラン・ページのアカウントをお持ちでない方

「お問い合わせフォーム」より、ご変更ください

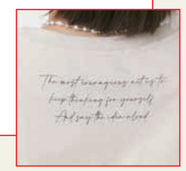
プランへの寄付となる商品のご紹介

JILL by JILLSTUARTが今年も寄付付きTシャツを販売

昨年度に引き続き、株式会社TSIは2022年4月～8月の5カ月間、JILL by JILLSTUARTから、売り上げの一部がプランに寄付されるTシャツを販売くださっています。いただいたご寄付は、ガールズ・プロジェクトに役立てられます。

今年は「誰かのために、私にできること。」をテーマに、Tシャツの背面には、英文メッセージ「もっとも勇気のいる行動とは自分で考えて続けること そしてその考えを声に出すこと」をプリントし、前面にはそのメッセージを体現したような凛とした一人の女性がデザインされています。


FRONT


BACK

ウクライナ避難民緊急支援

プラン・インターナショナルの活動地域から

ウクライナでの紛争激化により、近隣国のポーランド、ルーマニア、モルドバに避難している子どもたちを支援するため、現地のパートナー団体、政府、国連機関と連携し、子どもの保護や心理社会的ケア（心のケア）、教育支援などに取り組んでいます。現地での活動の一部を写真でご紹介します。







子どもたちの心のケア

ウクライナからの避難者のなかには大人の同伴者がいない子どもや、目の前で爆撃に遭遇するなど、過酷な体験をした子どももいます。そのため、安心して過ごせる居場所の提供と同様に、子どもたちの心のケアを行うことがとても重要です。プランはモルドバの国立児童虐待防止センターと連携し、心理士、教師、ソーシャルワーカーからなる専門チームによる、遊びやアートを通じた心のケアセッションを実施しています。







教育支援

慣れない避難生活を送る子どもたちにとって、教育の継続は、日常生活を取り戻すことにもつながります。モルドバでは、難民受け入れ施設に滞在している子どもたちに、通学用リュックを含む学習キット500セットを配布しました。キットには、ペンやノート、色鉛筆のほか、歯ブラシや石けんといった衛生用品なども含まれています。また、ルーマニアでは、教育アプリがインストールされたタブレット100台を避難所や学校内の仮設教室に通う子どもたちに配布しました。

プランのSNSをフォローしてください

プラン・インターナショナルのFacebook、Instagram、Twitterで活動国の情報や事務局の日々のあれこれを発信中！

※「国際NGOプラン・インターナショナル」で検索してください。



表紙写真ストーリー

今号の表紙は、ウクライナからモルドバのキシナウ市に避難してきた女の子。プランが配布する学用品や衛生用品のはいった通学用リュックを受け取りにきてくれました。キシナウ市の学校に登録されるウクライナの子どもたちの数は日に日に増えています。プランは現地の行政と連携し、子どもたちのニーズを満たし、新しい教育環境に適応するために必要な支援を続けています。

ご意見、ご感想をお寄せください

プラン・ニュース120号アンケート

PLAN NEWS
2022 SUMMER NO.120

表紙写真：モルドバ

公益財団法人プラン・インターナショナル・ジャパン
〒154-8545 東京都世田谷区三軒茶屋2-11-22 サンタワーズセンタービル10F
TEL：03-5481-6100　FAX：03-5481-6200
www.plan-international.jp
※ご連絡はウェブサイトの「お問い合わせ」フォームよりお願いいたします。